

スイジスターンの「ハワールージュ」とは何か

余 部 福 三

はじめに

現在のアフガニスタンの西南部にあたるスイジスターン Sijistan (スイースターン Sistan) は、アラブ侵攻以前にはヘルマンド河口に近い都市ザランジュ Zaranj, Zarang に拠点を置いたササン朝ペルシアの総督 *mazdan* の支配下にあった。一方、五世紀に北方ユーラシア草原から侵攻したイラン系またはトルコ系の騎馬遊牧民エフタル族の支配者ズンビール *zumbur* は、ルッハジュ Rukhkhaj, Rukhud を冬营地、ザープリスターン Zabulistan を夏营地として、アフガニスタン東南部を支配していた。アラブはスイジスターン征服後、ザランジュと、ヘルマンド川とアルガンダーブ川との合流点に位置する都市ブスト Bust に定着し、ズンビールとの絶え間ない戦争を繰り返したが、一方では、スイジスターン内部の「ハワールージュ Klawari」(単数形

ハーリジー Kharizi) と呼ばれるムスリムによる反抗に苦しめられるようになった。

かれらは、一〇—一二世紀にアッバース朝を支持する神学者アシュアリー、バグダーディー、シャフラスターニーらによって書かれた異端学書(アッバース朝の反対派を系譜的に分類し、その主張を紹介・論駁する)によると、第二次内乱以後にウマイヤ朝に敗れて逃亡してきたアズラク派 Azraqi やナジュタ派 Najdat に始まるとされる。しかし、実は「ハワールージュ」なる用語は、アッバース朝期の体制派の学者がかれらが正統と見なす政権(初期の四人のカリフ、ウマイヤ朝、アッバース朝)に抵抗した諸勢力のうち、四代カリフ、アリー 'Alī b. Abī Ṭālib とその子孫の支持派(シーア派)を除く、アラブを中心としたムスリム諸勢力を、イスラーム共同体から「離脱した者」という意味で一括して呼んだ呼称に過ぎない^①。したがって、第一次内乱でアリーの陣営

から離脱したイラク中部の軍営都市クーファ Kutā のアラブ（ハルリー・*Ḥarūrī* 派）、第二次内乱でシリアのウマイヤ朝とメッカのクライシ族の双方に抵抗したアラビア半島のアラブ（ナジュダ派）とイラン南部のファールス *Fārs*、キルマーン *Kimān* で活動したアラブ（アズラク派）、また、ウマイヤ朝末期にアラビア半島西南部イエメンでの抵抗を指導したイラク南部の軍営都市バスラ *Basra* のアラブやその非アラブ系庇護民であるマワリー *muwallī*（イバード派 *Ḍabīṭya*）、イフリーキヤ（現在のチュニジアを中心とした地方）で蜂起したベルベル、イラク北部のモースル地方で蜂起したアラブ等、さまざまな勢力が「ハワーリジュ」の中に含まれている。

しかるに、ボズワースは異端学書に基づき、「ハワーリジュ」なる一つの宗派に政治党派が実在し、第一次内乱以来連綿として続くという予断をもっている。^③ 一方、シャアバーンはこれを否定するとともに、「ハワーリジュ」運動を、イラン高原北東部ホラーサーン *Khurasān* 地方とインドとの貿易がアラブ征服後に中断したため、スイジスターンの経済が不況に陥り、生活貧窮者が匪賊化し、略奪や保護料の強要を行うようになったものと解釈した。^④ スイジスターンの「ハワーリジュ」運動についての従来の見解は管見によれば、ほぼ以上につき、本稿がその実像を解明しよ

うと試みるだけの価値はあろう。

史料について一言すれば、九世紀後半のアッバース朝の官僚、バラズリーによる『征服史』とヤアクービーによる帝国地誌『諸国誌』が、アラブ征服後のスイジスターンについて多くの情報を提供するが、ともにアッバース朝初期で記述が終わっている。一方、一世紀半ばにスイジスターンで書かれたベルシア語の愛郷的地方史『スイースターン史』が、九世紀以後の「ハワーリジュ」とその反対派であるアイヤール *ʿayāl* について詳細な情報を含んでいる。この情報は、タバリーとヤアクービーの『世界史』や、一〇世紀のサツラーミーによるホラーサーン史（これは散逸したが、ガルディーズイーのホラーサーン史とイブヌル・アシールの『世界史』に引用される）によって裏づけられる。さらに、九世紀後半にアイヤール運動から勃興したスイジスターンの地方政權サツファール *Saffār* 朝については、一〇世紀のイスタフリーの地誌と、同時代史料を引用したイブン・ハッリカーンの大人名事典が、『スイースターン史』を補足する貴重な材料を含んでいる。

本稿では、史料は本文中の括弧内に示した。その略号は以下の通りである。

TS: *Ta'rikh-i Sistan*, ed. Malik al-Shu'ara' Bahar, Teheran,

1935.

F: al-Baladhuri, *Futuh al-Buldan*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1866.

YB: al-Ya'qubi, *Kitab al-Buldan*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1892.

YT: al-Ya'qubi, *Tarikh*, Beirut, 1960, vol. 2.

Tabari: al-Tabari, *Tarikh al-Rusul wa'l-Mulak*, ed. M. J. de Goeje *et al.*, 3 series, Leiden, 1879-1901.

Muruj: al-Mas'udi, *Muruj al-Dhahab*, ed. C. Pellat, 1966-79, Beirut, vol. 5.

Athir: Ibn al-Athir, *al-Kamil fi'l-Tarikh*, ed. C. Tornberg, Beirut, 1965-7.

Gar: Gardizi, *Zayn al-Akbar*, ed. 'Abd al-Hayy Habibi, Teheran, 1969.

Khal: Ibn Khallikan, *Wafayat al-A'yan*, ed. Ihsan 'Abbas, Beirut, 1972, vol. 6.

Isf: al-Isfahani, *al-Masalik wa'l-Mamalik*, ed. Muhammad 'Abd al-'Al al-Himri, Cairo, 1961.

Ash'ari: al-Ash'ari, *Maqalat al-Islamiyyin*, ed. H. Ritter, 2nd edition, Beirut, 1963.

Bagh: 'Abd al-Qahir al-Baghdadi, *al-Farq bayna'l-Firaq*, Beirut, 1985.

Shah: al-Shahastari, *al-Milal wa'l-Nihal*, ed. 'Abd al-'Aziz al-Wakrl, Cairo, vol. 1.

① R. N. Frye, *The Golden Age of Iran: The Arabs in the East*, London, 1975, pp. 130-4; Fukuzo Amabe, *The Emergence of the 'Abbasid Autocracy*, Kyoto (京都大学出版会), 1995, pp. 48, 124, 216. cf. M. A. Shaban, *Islamic History: A New Interpretation* 1, Cambridge, 1971, pp. 76, 96-7, 103, 106, 162, 164.

② 余部龍三「インローキーヤとイランの定着とイスラムの抵抗運動」『人文自然科学論集』一〇四号 一九九七年 五九一〜一頁。

③ C. E. Bosworth, *Sistan under the Arabs*, Rome, 1968, pp. 37-42, 87-91.

④ M. A. Shaban, *Islamic History: A New Interpretation* 2, Cambridge, 1976, pp. 96-7.

1 初期の「ハワリージ派」

バスラのアラブがイラン高原南部のファールス、キルマーンを経由して進軍し、ザランジュのブルズバーンなどスイジスターンの支配層に定額貢納を約束させたのは、三代カリフ、ウスマーン・'Uthman b. 'Affan の時代の三二〇/六五二—二二年、ラビー・イン・バ・ヤール al-Rabi' b. Ziyad al-Harithi の東征によること

あろうが（F 392-4; TS 80-3; YB 281）¹、その後も支配層の反抗が続いた。バスラのアラブがザランジュとブストに定着し、役所 *dhwan* を通じて徴税を監督し、住民のイスラーム化が始まったのは、第一次内乱後の四一／六六一年、カリフ、ムアーウィヤ Mu'awiyah によってウマイヤ朝の一族、イブン・サムラ 'Abd al-Rahmān b. Samura が大軍とともに派遣されたときと思われる（F 396-7; YB 281-2; YT 217; TS 88-92）。スイジスターンに定着したアラブがバスラ、ホラーサーンで圧倒的多数を占めるタミーム Tamīm 族とバクル Bakr 系諸部族（ともにアラビア半島北東部出身）であったことは、まもなく登場するアラブの大半がこの両部族の出身であること（TS 104, 131-2, 136-7, 147）から確認できる。第二次内乱中には、タミーム族の有力者がザランジュのほか、ウーク Uq' ハーシム Khwāsh' フアラフ Farah など地方都市にも定着し、勢力を扶植したようである（TS 104; F 398）。

以後、『スイースターン史』をはじめ諸史料には、「ハワーリジュ」と呼ばれる人々がカリフとその総督に対する抵抗勢力としてしばしば登場するようになる。以下に、これらに関連する記述を列挙して検討する。

1 『スイースターン史』にはじめて登場する「ハワーリジュ」は、七九／六九八年、クーファとバスラの総督、ハッジ ヤーリジュ Hujaj b. Yusuf によって、ズンビールを打倒するためにクーファ・バスラのアラブの大軍とともに派遣されたウバイドウッラー 'Ubaydullāh b. Abī Bakra がキルマーンからザランジュに進む途中に遭遇した人々である（TS 110）。この前年までキルマーンでは、タミーム族のカタリー Qatari b. 'Ujā'a の指導下にアズラク派がバスラのアラブに対して根強い抵抗を続けており、ウバイドウッラーが遭遇したのはキルマーンのアズラク派の残党であると思われる。

2 八六／七〇五年、スイジスターン総督に対して、「ハワーリジュ」の一人、アブー・ハーリダ Abu Khalida という者が有力者 *buzurgān* を集めてスイジスターンで蜂起し、戦闘のあと捕えられ、ハッジャーリジュのもとに護送されたという（TS 118）。アブー・ハーリダも他の有力者もアラブの所属部族が明記されず、土着の支配層のようである。これは、土着支配層のかなりの部分がすでにイスラームに改宗していたが、アラブとは同化していなかった（税負担や権力への接近で差別されていると感じていた）ことを示す。この点では、アンダルス Andalus（イベリア半島）で改宗した西ゴート貴族がムワッラ

ド *muwallad* として連帯し、アラブに対抗したのと酷似している。^①

3 一〇七/七二五—六六年にスイジスターン総督に任命されたイブン・グライフ Yazid b. Ghurayf al-Hamdani は圧政を敷いたため、ある夜、五人の「ハワリジュ」がザランジュに侵入し、警察長官 *amīr-i shūrī* を殺した。五人は夜間の戦闘で全員が殺されたという。しかし、この事件のころから、「ハワリジュ」の勢力は一段と強まった (TS 126-7; YT 319)。総督が徴税を強化したことが原因のようであり、したがって、この「ハワリジュ」は土着のムスリム地主を中心とした人々と思われる。

4 スイジスターンのタミーム族、バクル族の一部は、かつてアズラク派のカタリーの仲間 *yāzan* であった (TS 131)。カタリー自身はイブン・サムラの指揮下にスイジスターン再征服に参加したタミーム族の一人であるが (TS 89; F 396)、『シャアバーンが指摘するように、第二次内乱におけるナジユダ派、アズラク派の主力はアラビア半島中部のヤマーマ地方のバクル系ハニーファ *Hanīfa* 族であろう。ナジユダ派が打倒されたあと、スイジスターンに逃れた者がアタウィー派 *‘Awīya* と呼ばれ (Ash‘art 92-3; Bagh 59, 63) 経緯は不明であるが、多くは

辺境のブストに駐留し、給与を受けるようになったものと思われる。かれらはウマイヤ朝に忠実であり、したがって、「ハワリジュ」とは呼ばれていない。ウマイヤ朝末期、バクル族が多くを占めるブストのアラブとタミーム族が多いザランジュのアラブとの間に闘争が起こり、ブストのバクル系のブジャイル *Bujayr b. al-Salhab* が総督代理 *kalīfā*、タミーム族のサワール *Sawār b. al-Ash‘ar* に反抗した。ガウガー *ghawghā* と呼ばれるイスラームに改宗しつつあったザランジュの土着の下層民はいったんサワール側で戦ったが、結局、一三〇/七四七—八年には、ブジャイルとサワールの両方を殺し、ブストのアラブをザランジュから排除したという (TS 131-2; YB 285)。

5 アッバース朝革命がホラーサーンで成功したあと、その指導者アブー・ムスリム *Abū Muslim* はスイジスターンに軍を送った。しかし、ザランジュの指導層 *khāṣṣ* とタミーム族、ガウガー (中下層民) はウマイヤ朝を正統と認め、アブー・ムスリムの総督を追放し、さらにブストにまで追撃し、タミーム族のアブー・アースィム *Abū ‘Asīm* やマタル *Maṭār b. Maysara* 指揮下のブストのアラブと協力して殺害したという (TS 134-7)。アブー・アースィムは一三八/七五五年にホラー

サーンから派遣された来たスライマーン Sulayman b. 'Abdillah al-Kindī にも抵抗し、ファラフで敗死した。スライマーンはウバイドウッラー・イブヌル・アラール Ubaydullah b. al-'Alā' 等土着支配層の支持を得てザランジュ、ブストを占領したものの、住民との摩擦を警戒してザランジュに入らず、ホラーサーンから来た軍とともに郊外に建設した軍営サリ・ラシユカル Sarī Lashkar に定着した (TS 139-40)。このアブー・アースィムがスイジスターン最初の「ハワーリジュ」思想の宣伝者とされるが (F 402)、それは、かれがナジュダ派またはアスラク派の子孫で、しかもアッバース朝から見て叛徒だからであろう。

6 ズーン・ヴァジュール Zūn Vajūl 地区 *rusaq* の土着有力者 *buzurg zadē*、フタイン・イブン・ルカード Hudayn b. Rūqād に率えられた「ハワーリジュ」がラシユカル Lashkar (Bashkar) で蜂起し、一四一／七五八—九年に、総督スライマーンの手で敗死した。まもなく、カリフ、マンスール al-Mansūr が中央集権政策の一環として、イラクからスイジスターン総督を派遣したとき、スライマーンは強く反発したが、新総督を支持したザランジュの人々 *wardun* のために敗れて捕えられたという (TS 140-1)。このマルドゥムとは支配層を

排除しないが、中下層民を主体とした表現と考えられる。

スカルチアは、ゾロアスター教や土着のズーン Zūn 神信仰の中心地であるウーク、カルクーヤ Karkūya、ズーン・ヴァジュールが多くの「ハワーリジュ」の出身地である事実を、イランの古代宗教がもつ厳格な精神と宗教的熱狂の継続性を示すものとしている^④。しかし、この事実はいずれ、これらの地が伝統宗教と土着支配層最後の拠点であり、したがって、「ハワーリジュ」の指導層の多くが土着支配層出身であることを示唆する。スカルチア自身も、エリート主義的な思想を民衆に押しつけようとする「ハワーリジュ」運動が中下層民主体の運動であることに強い疑念を示している^⑤。

7 一五〇／七六七年にはイブン・シャッダード Muḥammad b. Shaddād という者がブストから反乱を起こし、総督をホラーサーンに追放したという。この叛徒はアーザルルーヤ Ādhartūya やマルズバーン等 *Majās* と呼ばれるイスラームに改宗していない土着支配層を多く含むため、「ハワーリジュ」とは呼ばれていない (TS 142-3)。マンスールが翌年、バグダードからアラブの中央政府軍指揮官マァン Ma'n b. Zayd をスイジスターン総督として軍とともに派遣したのは、この乱を鎮圧するためであろう。マァンは甥のヤズィード・イブン・

マズヤド Yazd b. Mazyaдとともに進み、総督代理 *khayfa* ウバイドウッラー・イブヌル・アラール土着支配層やアラブから財産を没収したあと、ブストからルッハジュに侵攻して、ハッジャージュ以来久しぶりにズンビールから貢納を徴収したとされる。マアンは各地に徴税官 *'ummal* を派遣したこと、かれの死後、バクル族がハラージュ *khawaj* (農地税) の減税を強く要求したこと、一般に圧政を強く非難されていることから見て、マンスールの中央集権政策に従って、総督直属の徴税官による従来の慣行を無視した厳しい収税を進め、アラブ地主からも原住民なみの農地税を徴収し、余剰を中央に送付しようとしたようである。これに抵抗した人々が「ハワリージュ」と呼ばれ、マアンはうち四〇人をザランジュからブストに連行した。かれは一二二／七六九年末、ブストで越冬しようとして宮殿を建設中、ターク *Taq* 地区 *rustaq* 出身の「ハワリージュ」に暗殺された。暗殺者が有力者であることは、のちバグダードで中央政府に工作活動していることから確認できる (TS 144-7; F 401; YT 384; YB 285; Tabari III 369)。

8 マアンの後継者ヤズィードはバクル族らの要求に屈して徴税の緩和をマンスールに提案したため、免職され、かわりにホラーサーン南部の大都市ヘラート Herat の代官がスイジス

ターン総督に任命された。この体制下で、州税務長官フダイン・イブン・ムハンマドが総督から独立した権力を行使し、厳しい徴税を継続しようである。その結果、「ハワリージュ」が活動を活発化させ、一五六／七七三年には税務長官を殺したため、二年後、マンスールはウバイドウッラー・イブヌル・アラールを総督に任命し、事態を沈静化しなければならなかった (TS 147-8; YB 285; F 401)。しかし、カリフ、マフディー al-Mahdi が一五九／七七六年、ホラーサーン軍出身の新総督を中央から派遣すると、「ハワリージュ」の一人、ヌーフ *Nuf* という者が抵抗し、かつてヘラート代官に随行して来た徴税官ズイヤード・イブン・フーム *Ziyad b. Humam al-Rasbi* を戦死させたという。さらに、ザランジュとブストのアラブまでがホラーサーンへの派遣（それにおそらく税収の中央送付）に対する不満から蜂起し、争乱はマフディーが翌年にウバイドウッラーを総督として復職させるまで続いた (TS 149)。

9 ウバイドウッラーの死後、ホラーサーン軍のズハイル *Zuhayr b. Muhammad al-Azdi* が一六一／七七七年から八年間スイジスターン総督として「人々に善政を敷いた *nikat handi*」とこう (TS 150)。これは、不作年に税率を緩和したり、地方の慣行を考慮したことを意味するのであろう。一六九／七八五

年に総督から独立した税務長官に任命された土着支配層出身と思われるイブン・ファルカド Bishr b. Farqad はいっそう支配層に譲歩したようであり、三年後には税収の中央送付になった新総督、ホラーサーン軍のイブン・ウマール 'Uthman b. 'Umara al-Muzani の手で処刑された (TS 151-2)。

一七五／七九一年にはウーク出身のフダイン（バクル族のマウラー）がブストとザランジュの間で多くの「ハワーリジュ」とともに蜂起し、総督イブン・ウマールをザランジュに包囲した。二年後、新しく派遣された総督がザランジュの中下層民出身の志願兵 *mutawwira ghazwa* とともにうって出てフダインを敗り、フダインは逃走中、イスフィザール Isfizar でホラーサーンの軍のために敗死したとされる (TS 153; Ahrn 6:124; Gar 129-30)。一七九／七九五年にもルツハジュ遠征から帰ってきた新総督に対して、「ハワーリジュ」の一人、ウマル 'Umar b. Marwan が抵抗したという。この間、総督の頻繁な交替にもかかわらず、州税務はほぼ一貫してズィヤード・イブン・ファームの孫ファーム Hunām b. Salama に任せられ、強化された徴税が継続したようである (TS 153-5)。

以上のうち、スイジスターンの「ハワーリジュ」とは言えない

1・4 項とアラブの叛徒という意味の 5 項を除けば、「ハワーリジュ」の中核はカリフや総督による中央集権的税制改革（徴税官による一律の徴税、徴税強化、税収の中央送付）に反発して蜂起した土着支配層であり、原住民なみの課税と税収の中央送付に反対するアラブもしいにかれらと行動を共にするようになった（7・8 項）ことがわかる。スイジスターンのアラブも他地域のアラブと同様、免税特権の継続と、種々の経費（都市壁・砦・ダム・堤防の修理、洪水被害からの農地・住居の復旧、札拝堂の維持費、役人・警察の人件費等）(TS 309) を除いたすべての税収を給与として分配することを求めたと思われる。したがって、「ハワーリジュ」はボズワースが言う第一次内乱以来、連綿として続くイスラーム異端派Ⅱ反体制派でも、シャアバーンが言うような略奪のみを目的とする匪賊化した貧弱者でもない。

それでは、このような土着支配層の実態と、史料からは見えにくい小経営農民（小作人・小規模自作農）の役割はどのようなものか。ササン朝末期のスイジスターンの農業経営については不明な点が多いが、他のササン朝領やローマ末期のシリアと大差ないものと考えられることはおそらく許されるであろう。元来、都市は国家を成し、都市領域に属する耕地を耕作する農民が人口の多くを占めた^⑥。大規模国家とは無数のこのような都市を支配下に置いた

ものであり、収税等、統治の基礎単位は依然として都市であった。しかし、ササン朝とローマの末期以後、都市領域の大きな部分を占有する大土地所有者の多くは都市から離れた山間、砂漠の中にも広大な農園を築き、多くの小作人を使役させるようになった。

イラクやスイジスタンでも多くの灌漑用運河が開削され、イラクではササン朝末期にディフカーン *dihkan* と呼ばれる非都市居住地主が他の地主や自作農からの徴税で大きな役割を果たすようになった。^⑧『スイースタン史』に登場するブズルグ *buzurg* の大きな部分もこれにあたるであろう。イスラーム以後にも、この趨勢は継続し、アラブ等がイラク、シリアに多くの私有農地や新しい開墾地 *day'a musaghal* を所有し、多くの小作人 *abkan, muzari* と契約するようになった。都市から離れた荘園の開発も引き続きさかんで、うちヴィラをもつものはカスル *qasr* (後出するように『スイースタン史』ではサライー *saray*)、城塞を擁するものはカルア *qal'a*、ヒスン *hiss* と呼ばれた。^⑨

一般的には、地主等地方支配層と小経営農民との対抗関係が想定されることが多いが、中下層民は地縁、血縁等の社会関係に埋没し、階級意識が微弱であり(階級関係の非対称性)、保護を必要とすることから支配層の特定の個人と日常的に結びつく場合が多い。^⑩したがって、小経営農民は貧窮すると、地方支配層を通じ

て政府と交渉し、なお容れられなかった場合、都市に移住するか、人里離れた地域や他の村で農耕を続ける(または遊牧民となる)か、山野で匪賊となる。剰余が少ない伝統的な非市場経済で小経営農民が大量に反乱に参加する条件は、プラスチックやコップによれば、地方支配層が政府の増税・徴税に対し、小経営農民と共通の利害を有する一方、長期にわたって安定的に土地を支配し、近隣の自作農も含めた小経営農民を保護下において危急時に組織連帯できることである。^⑪スイジスタンの当時の状況はこれにほぼ適合すると考えられ、「ハワリリジュ」の指導者であるブズルグ層の呼びかけに応じて結集した群衆 *guruh, mardum* (TS 140, 142, 156) の大半は小都市・村落・荘園に居住する小経営農民であろう。

また、しばしば主体的行動を取った大都市のガウガーまたはムッタウィアと呼ばれる中下層民(4・5・6・9項)とはどのような性格をもつのか。かつては、都市の中下層民が蜂起するのは、生活の貧窮もしくは政治的扇動に起因すると考えられてきた。しかし、近年トムソンやデイヴィスは、モラル・エコノミー(社会の構成員がその社会的地位に応じた伝統的な責務を果たす)や、儀礼・信仰などの文化的伝統を、支配層や民衆の一部が侵犯したにもかかわらず、政府が放置した(あるいは民衆の援助を必要と

する」と感じたときに、権力の代行者として、集団で比較的顺序だった抗議運動を起こすと論じている。ザランジュの中下層民はウマイヤ朝末期までにイスラーム改宗が進み、愛郷精神とカリフへの忠誠心をもつ一方、総督が伝統的秩序を維持できないと見た場合、必ずしも支配層の指導によらず、総督に反抗も辞さない存在に成長していたのではないかと。

- ① 余部福三「イブン・ハフスーンの乱とスペインのイスラーム化」『日本中東学会年報』一号、一九八六年、一八八—二六頁、「アンダルス下辺境の政治と社会」【人文自然科学論集】七六号、一九八七年、一一—一九頁。
- ② *Islamic History* 1, pp. 96-8.
- ③ 州内でクラー^{kura}は中心都市 *qasaba* を中心としていくつかの都市を含む広い行政地域で、ルスタークはクラーの中で公庫の徴税のために組織された都市を中心とした集落群である。他にカリフ直轄領 *sawafi* があつた (TS 28-9)。
- ④ G. Scarcia, "Due precisazioni sul Harigismo sistiano", *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli*, new series 15 (1965), p. 304.
- ⑤ Scarcia, "Lo scambio di lettere tra Harun al-Rasid e Hamza al-Harith secondo il *Tarih-i Sistan*", *Atti* 14 (1964), p. 625.
- ⑥ マックス・ウェーバー「都市の類型学」世良晃志郎訳、創文社、一九六四年、一六—七頁、「古代社会経済史」渡辺金一・弓削達訳、東洋経済新報社、一九五九年、五七—六四頁。宮崎市定「大唐帝国」中公文庫、一九八八年、二〇—三〇頁。
- ⑦ J. Howard-Johnston, "The Two Great Powers in Late

Antiquity: A Comparison", *The Byzantine and Early Islamic Near East*, III, Princeton, 1995, pp. 198-210.

- ⑧ A. Christensen, *L'Iran sous les Sassanides*, 2nd edition, Copenhagen, 1944, pp. 112-3; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, Leiden, 1956 — (以下 E. I. 略記), vol. 2, "dihkhan" (by A. K. S. Lambton); R. N. Frye, *The Heritage of Iran*, 2nd edition, London, 1976, pp. 259, 268-9; *Golden Age*, pp. 7, 40, 64; M. G. Morony, *Iraq after the Muslim Conquest*, Princeton, 1984, pp. 187-90. ローマ帝国の都市居住地主からなる都市参事会員 *decuriones, curiales* が都市域の徴税義務を負わされたが、負担に耐えられなくなると、参事会員職から逃れたり、荘園に退いた。A. H. M. Jones, *Later Roman Empire*, vol. 1, Oxford, 1964, pp. 712-66. シリアでは地主や中規模農民が北部の諸山地や中部のドゥクルス山地を開発し、石造の教会・家屋からなる非常に密集した荘園・村落群を建設した。W. Ball, *Rome in the East*, London, 2000, pp. 207-45. 中国でも後漢・魏以来、国家・豪族の荘園が発達した。【大唐帝国】三七—九、五八—六〇、一一〇—一頁。
- ⑨ ウマイヤ朝一族が築いた Hish Masi'ana, Qasr al-Hayr al-Sha'qi, Qasr al-Mushatta 等が有名だが、マンニース朝期にかけ有力者がこれらへ多く建設をした。H. Kennedy, "The impact of Muslim rule on the pattern of rural settlement in Syria", *La Syrie de Byzance à l'Islam, VII-VIII^e siècles*, Damascus, 1992, pp. 291-7. マンニース朝期のイラクやエジプトでは小作人が直接、政府に納税した。清水和裕「後期アッバース朝の私有地における国庫の取り分」『東洋史研究』五七号、一九九八年、五二〇—五五一頁、森本公誠「初期イスラーム時代エジプト税制史の研究」岩波書店、一九七五年、三五—七—九頁。
- ⑩ M. Mann, *The Sources of Social Power*, vol. 1, Cambridge, 1986, pp. 25, 216-7, 252-3, 269-70, J. R. コックス「経済史の理論」新保

博・渡辺文夫訳、講談社、一九九五年、一七五頁。

① W. Brustein, "Class conflict and class collaboration in regional rebellions, 1500 to 1700", *Theory and Society* 14 (1985), pp. 445-68; P. M. Cobb, *White Banners: Contention in 'Abbasid Syria, 750-877*, Chicago, 1997, pp. 185-206.

② E. P. Thompson, "The moral economy of the English crowd in the eighteenth century", *Past and Present* 50 (1971), pp. 76-136; N. Z. Davis, "The rites of violence: Religious riot in sixteenth century France", *Past and Present* 59 (1973), pp. 51-91.

2 ハムザ・イブン・アーザラクの反乱

一七九／七九五年 (Tabari III 638; Ahr. 6-147; Bagh 66; Gar 131) に始まったハムザ Hamza b. Adharak 指導下の「ハワリジュ」の反乱は大きな成功を収め、スイジスターン史に時代を画する事件となった。ハムザはズーン・ヴァジュールの土着支配層 *buzurg* 出身であり、ムスリムとなって学識を獲得したあと (TS 156) フタインの「ハワリジュ」運動に加わったという。異端学書によれば、フタインの死後、「ハワリジュ」の間で路線対立が生じた。ハラフ Khalaf という指導者がスイジスターンの「ハワリジュ」の多数意見に従ってカダル *qadar* (定命) を説いたのに対し、ハムザは人間の自由意志と罪を唱える立場から支配者の罪を断罪し (革命を主張し)、また「ハワ

リジュ」過激派の教説に従って、自分の軍に参加しない人々 (子供を含む) を地獄に落ちる非ムスリム *mushtak* と認定したとされる。実際には、ハムザは反対派を虐殺し、カリフの称号である *amir al-mu'minin* を名のつたが、戦闘に参加せずして、かれに協力する *sinba qa'ida* を歓迎したという (Bagh 63, 66-7; Shah 130)。以上の記述はハラフが反乱を躊躇したのに対し、強硬派がハムザを指導者に擁立し、主導権を確立したことを意味するのであろう。

反乱の始めに、ハムザは地方の徴税官 *ummal* を殺害し、仲間 *jaran* をラシカルに結集したあと、一八二／七九八年にはザランジュを攻撃し、総督イーサー 'Isa (税収の中央送付に非常に熱心なホラーサーン総督イブン・マーハーン 'Abd b. 'Isa b. Mahan の子) の軍を敗つてホラーサーンに走らせたといわれる (TS 156, 159)。ハムザは住民に対して、「二デイルハムの税も、どんな金目のものも、これ以上諸君の安全を保証できないような政府 *sulṭan* に払うな。私は諸君から何も望まないし、取らない、私は一か所にとどまるつもりはないからである」と宣言したという (TS 156)。このように、ハムザの乱は徴税強化、税収の中央送付に対する地方の抵抗という性格を明確にもつもので、土着支配層に指導されているが、広く小経営農民の支持を集め、アラ

ブもまた多数参加し得た(TS 168) 広範な運動であったと思われる。投降を呼びかけたカリフ、ラシード Harun al-Rashid に返事として送ったとされるハムザの長文の手紙(TS 164-8)は、異端学書で伝えられる「ハワーリジュ」特有の教説と重なる所がほとんどなく、単に三代カリフ、ウスマーンの中期以後の政治がイスラームの原則から逸脱し、ムスリムが分裂したこと、蜂起の唯一の目的が徴税官による苛斂誅求 *itāḥat al-amwāl* に抵抗するためであり、ラシードの王権 *mulk* に挑戦するためではないことを強調するだけの内容になっている^①。

しかし、ザランジュの人々はホラーサーン総督イブン・マーハーンが一八六／八〇二年に任命したソグド Sugd 出身のスィジスターン総督サイフ Sayf b. 'Uthman al-Tarabī とスィジスターンのクルス Qus 地区 *rustaq* 出身の州税務長官フダイン・クルスィー Hudayn b. Muhammad al-Qusī を受け入れた(TS 158)。これに対し、ハムザはホラーサーンに進出した。かれはヘラート代官を敗死させ、ナイサーブル Naysabur 方面に進んだが、途中バーハルズ Bakhaz' で、イブン・マーハーンが派遣した子イサーに撃退された。イサーは一八八／八〇四年、スィジスターンに進み、ウークやジュワイン Juwayn で「ハワーリジュ」を虐殺し、ハムザを支持していた村々 *qura, diha* に火

を放った。かれがザランジュやファラフで集めた税収をもってホラーサーンに帰ったあと、残されたソグド出身の総督はソグドの兵を率いてハムザを追跡し、イスフィザールで敗った。ハムザが住民の中に居るシンバの援助で、ヘラート近郊まで逃走に成功したため、ヘラート付近のブーシャング Bushang の代官ターヒル Tahir b. al-Husayn はこのような住民をも攻撃・殺戮したという(Gar 131-2; Athir 6:150-1; Bagh 67-8; TS 159-60)。

このころ、ソグドをはじめ中央アジアの土着支配層がアラブ地主ラーフィー Rāfi' b. al-Jayṣi を指導者に擁立して大規模な反乱を起こし^②、反乱を鎮圧するため、ターヒルなどホラーサーンのアラブや土着支配層がソグドに結集した。このすきに、ハムザは再びヘラート、ブーシャングを襲い、政府の徴税官 *'ummal* から税収を奪取した。しかし、ナイサーブルでは反「ハワーリジュ」運動が高揚し、アブドゥッラフマーン 'Abd al-Rahman と云う者が二万というムッタウィア(志願兵)を集め、一九四／八一〇年、ハムザを敗ってヘラートを奪回した(Gar 132-3; Athir 6:209; Bagh 68)。

まもなく、ラシードの二子、アミン al-Amin とマームーン al-Ma'mūn の大規模な内乱が勃発したため、ハムザは生き残りに成功した。かれは政府の徴税業務を妨害し、かつ部下を自活さ

せるため、部下を五〇〇人ずつに分け、スイジスターンとその周辺に派遣し、自らも各地を転々とし (TS 160)、スイジスターンの半ばを抑えたともいう (TS 171)。しかも、「かれらは自らのためには何も取らず、また誰にも何も取らせなかった。……政府側の軍が攻撃しないかぎり、スイースターンの人々に損害を与えなかった」 (TS 176-7) とされる。のち、ザランジュで政権を握った反「ハワリジュ」のヤアクーブ・イブヌル・ライス Ya'qub b. al-Layth やえ次のように回想している。

ハムザは「諸君が圧制を働いた」として、政府側の人々 *ashib-i sulṭān* に対し立ち上がったものの、この都市 (ザランジュ) を決して標的にせず、スイースターンの人々に危害を加えなかった。そのため、スイースターンの民衆 *amṣār* は異邦人 *ghurabā'* (ソグド・ホラーサーン人) に支配されていたが、かれからは安全であり、むしろ、かれの反乱のおかげで安全を享受できた (TS 203)。

ただし、この記述は後世に形成されたハムザ英雄伝説^③によって美化されたものであり、運動に参加し土地から離れた小経営農民が匪賊化し、異教徒の国々を含め各地での略奪を生活手段とするようになったことはまちがいない。事実、ハムザの死後、最初に後継者に選ばれたガーシャニー Abu Ishāq Gashanī がムスリム

の略奪を禁じたが、「ハワリジュ」はその命令を拒み、かれをザリフ Zarith 湖の島に追放したという (TS 180)。

一方、一面では、ハムザの乱はスイジスターンの地主層や小経営農民がアッバース朝やホラーサーン総督 (しかも、スイジスターン総督とその兵は「よそ者」ソグド人が多くなる) によって過度に収奪されることを防ぐ役割をもち、略奪が大きな影響を及ぼさない限り、住民の静かな「支持」を得ていたようである。一九二〇八年に総督フダイン・クルスィーが死ぬと、アッバース朝への忠誠を保持しているザランジュの人々さえ、税務帳簿 *diwān* を焼却し、各地域の税収額を不明にしたという。しかも、フダインの子ムハンマドに指導された地方支配層がハムザに加担しないものの、歴代総督に抵抗を続け、徴税を非常に困難にした (TS 160-2)。こうして、スイジスターンではアッバース朝の主権は守られたものの、税収が中央や州外に送られることはなくなった (TS 27, 158)。

以後、微力な歴代総督はハムザとの共存を選択した。一九九〇年一五年に総督に任命されたライス Layth b. Tarsūsī は「ハワリジュ」との積極的な戦いを要求する中下層民 (ガウガー) に抗して、ハムザと和約 *sulḥ* を結び、4年あまりの在職中、「ハワリジュ」は総督の庇護下で自由にザランジュに出入りするこ

とができたという。ライスは「ハワーリジュ」の支配地域を容認し、自らの支配地域で得た税収を州外に送付するかわりに、私邸の建設、私有農地・開墾地 *dhay'*, *musaghlat* の購入、開発に投資した (TS 176)。内乱に勝利したマームーンが二〇五／八二一年、ターヒルをホラーサーン総督に任命して以来、ターヒルの子孫があいついでホラーサーン総督に任命され、スイジスターンを管轄し、その総督を任命するようになったが、状況は変わらず、多くの時期には、フダインの子、ムハンマドとムアッダル Mu'addal が総督として「ハワーリジュ」との共存、農地の購入を続けた。二〇八／八二三年には総督に任命されたムアッダルが解任された前総督、サーマーン *Siman* 家のイルヤース *Ilyas b. Asad* の抵抗に会ってザランジュから追放されたあと、ファラフに行つてハムザに協力を要請し、ザランジュ周辺の農業地域 *sawad* の支配を回復することができたとされる (TS 177-8)。

ハムザは二二三／八二八年に死亡 (TS 180; Gar 133, 135; YT 456)。二年後、「ハワーリジュ」はザランジュ近郊のクリンク *Kurink* (*Uring*) 出身の判事 *qadī* というアブー・アウフ *Abu 'Awf b. Bazr* に忠誠を誓ったと云う (TS 180-1; Gar 133)。これを機に、ホラーサーン総督アブドゥッラー (ターヒルの子) は「ハワーリジュ」を討伐するため、砂漠・山岳での進

軍・戦闘の装備を備えたソグド・ホラーサーンの兵をスイジスターンに派遣した。しかし、ザランジュの兵とガウガーをも併せたこの軍は二二六／八三二年、ザランジュとアストの間にあるガルヴァードクン *Garvadrūn* で大敗を喫した。このため、アブー・アウフは一時、カルクーヤまで進出し、ザランジュに税収が入ることを防いだ。アブドゥッラーは給与にあてる資金をもつた軍をイルヤースの指揮下に派遣したが、この軍もまた敗れ去つた (TS 181-3)。ようやく二二二／八三七年、再度、派遣されたイルヤースが「ハワーリジュ」の本拠ラシュカル、ウークを攻めたあと (TS 187-8)、「ハワーリジュ」の勢力の中心は、ザランジュとアストの間にあるキッス *Kiss* に移つたようであり、そこではアンマール *'Ammār b. Yasir* が指導者に選ばれた (TS 193; Ist 142)。

二二五／八四〇年、イルヤースにかわつて、スイジスターン総督に任命されたフダインの子イブラーヒム *Ibrahim* は「ハワーリジュ」との戦闘を避けつつ、農地 *dhay'* を購入し、ザランジュの城塞 *ay* 中にある総督官邸 *dar al-imara* のほかに市内と郊外に私邸 *saray* (郊外のサラリーはおそらく荘園付設) をもつようになった (TS 189-91)。

以上見たように、ハムザを支持する「ハワーリジュ」もまたア

ツバース朝の徴税強化・税収の州外への送付に反対する支配層を中心とした広範な土着民やアラブであった。総督は自らの支配地域を確保し、ある程度の税収を確保したものの、中央やホラーサーンに送付することはなく、余剰税収を私有農地の購入・開発に投資した。こうして、スイジスターンは事実上の自治を獲得した。

① ボスワース (*Botswana*, 97-9) は「ハワージュ」に対する予断からこの手紙を曲解し、忠実に紹介していない。異端学書が伝える「ハワージュ」的教説がほとんどないことが、この手紙が真作に近いことの証拠になる。

② Anabe, *Emergence*, pp. 97-8.

③ E. I. vol. 3, "Hamza b. 'Abd al-Mutaitib" (by G. M. Meredith-Owens). ハムザはグルル Ghur 地方 'インズ' 中国、ゴザンン Ram などで遠征したとされる (TS 169-70, 177)。

④ 以後、中央アジア・ホラーサーンの支配層は故郷で大きな自由を獲得しただけでなく、兵を率いて大挙、中央に移り、高官・將軍としてアラブやホラーサーン軍 *abna'* にとつてかわった (ターヒル家はバグダード代官職をも独占)。Emergence, pp. 102-4, 135-69.

3 反「ハワージュ」運動

ザランジュのムスリム中下層民 (ガウガー) がカリフに忠誠であり、カリフの総督を支持して戦い、フダインの反乱の頃から、志願兵 (ムッタウイア) として総督軍に加わって「ハワージュ

ユ」と戦うようになったことはすでに述べた (第1節9・第2節の二一六/八三一年)。さらに、ブストなどでアツバース朝への忠誠を堅持しつつ、「ハワージュ」に妥協的な総督に対しても、反抗を辞さない勢力が生まれた。後者は通常アイヤール、*ayyār* と呼ばれた。シャアバーンはかれらは反「ハワージュ」自衛軍であり、「ハワージュ」からの転向者が多いと解釈した。①また、清水宏祐はアイヤールを、ときに略奪・強盗を犯すことがあるものの、任侠精神 *yawmānīya* と愛郷精神・縄張り意識をもち、支配者の圧制や外部勢力の侵入に抵抗する集団と考えている。②

以下に史料に登場するアイヤールを列挙して、その性格について検討しよう。

1 総督フダイン・クースイーの死後 (一九二/八〇八)、その子ムハンマドがザランジュの支配層 *nasabiyah* の支持を得て、再任されてきたソグド出身の総督サイフのザランジュ入市を拒み、税収のホラーサーン送付に抵抗しようとした。これに対し、ブストの中下層民 (ガウガー) がブストに逃れて来たサイフを助け、アイヤールの指導者 *sarhang* ③、アブル・ウルヤーン Abul-Uryan (かれ自身はザランジュ出身という) の指揮下にザランジュを攻めるべく、その郊外のサリ・ラシュカルまで進

んだという (TS161)。

2 ハムザに対して為すところがないソグド出身の総督ムハンマド・タラービー Muhammad b. al-Asī'ah al-Tarabī に対し、一九九〇/八二五年、ブストのガウガーがハルブ Harb b. 'Ubayda (ハーシシュ出身) の指導下に蜂起し、戦闘によってブスト代官を捕え、「アラブの軍はハムザと戦うだけの力がない」として人々に戦いへの参加を呼びかけた。ザランジュでもアラブの指導下にガウガーが蜂起して総督を追放すると、ハルブはブストから進んでザランジュを占領し、総督の財産・家畜を奪った。しかし、マームーンから派遣された新総督ライスは、「ハワーリジュ」に対する戦いに参加を呼びかけるハルブをあくまで拒み、逆にハムザと結んでハルブを敗った。このあと、ライスはアイヤールとの和解にも努め、かれらを食事に招いては礼服 *khil'a* を贈与したという (TS172c)。このアイヤールとは主にブストのガウガーのことであろう。

3 歴代のスイジスターン総督が「ハワーリジュ」と協調、または放置したのに対し、二二〇〇/八二五年、ブストでアイヤールに指導されたガウガーが結集してそのような総督と戦い、結局、翌年、新総督フサイン・サイヤーリー Husayn b. 'Abdillāh al-Sayyārī (ソグドの叛徒ラーフィーの一族) によ

って敗れ去ったという (TS179)。

4 二二一八/八三三年に総督として再任されたフサイン・サイヤーリーが「ハワーリジュ」と妥協しているのに対し、ザランジュで、もと「ハワーリジュ」の一人であったというウバイイ Ubayy b. al-Hudayn が反「ハワーリジュ」闘争を呼びかけ、人々 *mandum* を結集した。これに対し、フサインはかれらを攻撃して解散させ、砂漠、山岳にまで追跡させ、さらに運動に同情的なザランジュのアラブや土着の支配層 *mashaykh* (フダイン・クースイーの子ムアッタル、イブラーヒームを含む) をヘラートに送って獄につないだという (TS184c)。かれらはアッバース朝には忠誠を守っており、のち、イブラーヒームは解放されてスイジスターン総督として派遣された。ウバイイらはザランジュで運動を起こしたため、アイヤールとは呼ばれていないが、ブストのアイヤールと同様な性格をもつであろう。

5 二二二一/八三六年、ブストでジャバリー 'Abdullāh al-Jabārī という者が人々 *mandum* を結集して、総督フサイン・サイヤーリーの甥であるブスト代官アブドゥース 'Abdūs をザランジュに追放した。新たにザランジュから派遣された代官もジャバリーには勝てず、和約 *sulh* を結び、礼服 *khil'a* を贈与したという。その後、ジャバリーは再び代官として派遣された

アブドゥースに追放されたようである。ようやく翌年、総督フサインの死後、イブン・ワースィル Muhammad b. Wasil という者が四散していた人々を集め、戦闘の結果、新代官を捕えた。かれはまもなく代官を解放しただけでなく、ザランジュに新総督（フサインの子）を訪れ、礼服 *khil'at* を贈与されて帰っている（TS 187-8）。ジャバリーのもとに結集した人々は「ハワリージュ」と呼ばれている箇所が一か所だけあるが、実際は「ハワリージュ」を容認している総督に反抗したわけで、1・2・3項のプストのアイヤールと大幅に重なりと見てよい。

6 ザランジュに近いカルニーン Qarnn でも「ハワリージュ」運動が高まり、その指導者の一人、カシール Kadh'r b. Rughad にかれの甥（姉妹の子）にあたる四兄弟、ヤアクーブ・イブヌル・ライス、アムル 'Amr、ターヒル、アリーが加わったという。ヤアクーブは銅細工師 *saffar*、アムルはラバを使った運搬人 *mukarr* または建設石工 *banad* とされ、したがってかれらは都市下層民出身と考えられている。しかし、史料の常として、このような記述はアッバース朝への反抗者を侮辱することを目的とし、事実でない場合が多く、カルニーンが伝統宗教の聖地（神話的英雄ルスタム Rustam の廐舎があったという所）であることを考えれば、支配層出身である可能性も

捨て切れない。かれらは戦闘に敗れて山城に包囲されたあと、「ハワリージュ」の立場から転向してプストに移り、アイヤールの指導者サーリフ Šalīh b. al-Nadr とディルハム Dirham b. al-Husayn (Nadr) の指揮下に入ったという (Ist 142; Gar 138; Khal 402; Athr 7-184; Muruj 108)。

7 キナーナ Kinana 族のアラブのマウラーである (Khal 402, 416; Athr 7-64) サーリフは、ザランジュに近いプーラーン Pulan 地方の有力者であった *buzurg wa asil* (TS 191, 198)。二三〇／八四五年、プスト地方では「ハワリージュ」と戦おうとしない代官アフマド Ahmad (総督イブラーヒームの子) に対して、サーリフの兄弟ガッサーン Ghassan が人々 *marhum* を結集して蜂起した。かれは敗れて処刑されたものの、運動はプストとカルニーン出身のアイヤールその他の人々による広範な蜂起に継承された。かれらは一時、アフマドをプストから追放したあと、名門アラブの調停でいったんアフマドと和解し、プストへの帰任を認めた。しかし、プストの支配層の指導者 *ra'is wa buzurg*、バッシヤール Bashshar b. Sulayman はソグド出身の徴税官によるプスト近郊の農業地域 *sawad* における厳しい徴税に強く抵抗し、再びアフマドを追放した。バッシヤールは施政権を掌握したあと、二重権力状態を解消するた

め、中下層民主体のアイヤールを圧迫したようである。これに対し、ガッサーンの兄弟サーリフがカルニン出身のカシル、ヤアクーブら多くの人々 *wardun* を率いて蜂起し、バッシヤールを敗死させた。プストの施政権を握ったサーリフは徴収したハラージュを部下に給与 *ḥaḥ* として支給したという (TS 191-3)。すなわち、大半が中下層民出身と思われるアイヤールはすでに生業を失い、略奪や給与に依存するようになって、支配層の一角を占めるまでに大きく変質した。

8 サーリフ、ディルハム、カシル、ヤアクーブらはアンマール指導下の「ハワーリジュ」をキッスに攻撃したあと、二二九〇/八五四年、アンマールと結んでいた総督イブラーヒムが派遣した軍にプストを奪われた。しかし、かれらは総督を攻めてザランジュ占領に成功し、ザランジュとその郊外にある総督や高官のサライーを略奪した。ザランジュの支配層 *khaz* と中下層民 *ʿamm* は、総督イブラーヒムがアンマールと軍を併せて首都を奪回しようとしたことに反発し、サーリフを支持するようになった。こうして、サーリフは総督と「ハワーリジュ」の連合軍を撃退し、さらにプストから駆けつけた軍をも敗った。ただ、プストで育ったかれがザランジュで支配層 *khawass*, *buzurgan* の私邸の略奪を続けたため、ザランジュの

人々の強い反感を買い、二四四〇/八五八年、支配層の支持を得たディルハム、ヤアクーブらによって追放された。この結果、ディルハムがザランジュの施政権を獲得したが、三年後にはホラーサーン総督が派遣した軍によって捕えられ、バグダードに送られた。このあと、ヤアクーブがディルハムの地位を継承したようである (TS 194-202; Isf 142; Khal 402-3, 416; Athir 764-5, 184-5)^⑤。ヤアクーブはザランジュの土着支配層と妥協し、マルズバーンと呼ばれるアズィーズ *ʿAziz b. ʿAbdillāh* を警察長官 *amīr-i shur* に任命した (TS 204)。

ザランジュの人々がサーリフを嫌ったのは、『スイースターン史』に明記されているように、基本的にはザランジュとプストの地域間対立を反映したものであろう (TS 198)。実際、サーリフはプストに拠って勢力を回復し、ズンビールと結んで執拗にヤアクーブと戦いつづけたあと、ようやく二四九〇/八六三年にルツハジュで敗れ去り、ズンビールの兄弟とともに捕虜になった (TS 204-6)。

ヤアクーブもまた各地に代官を派遣し、役所 *diwan* を設置してハラージュを徴収し、部下に給与を支給した (TS 203)。かれは入隊を希望する若者を実技試験によって採用し、現金・武器等の所有物をすべて預かって売却した上で名簿 *diwan* に

登録し、必要なものをすべて支給し、預かった金を退役時に給与の総額とともに返却したという (Mar'aj 111-2)。さらに、ヤアクーブはアンマールに対して、スイジスターンの税収を州外に送付しないことを約束するかわりに、アッバース朝カリフを承認し、軍を合流させることを求めた (TS 203)。アンマールは提案を拒否したが、「ハワリージュ」の多くは地主層 *buzurgun* も含め、ファルカド家のアズハル *Azhar b. Yahya b. Zuhayr b. Farqad* の仲介で次々とアッバース朝に忠誠を誓い、ヤアクーブの軍に合流した (TS 204-5)。アンマールの戦死後 (二五一／八六五)、ラシユカル出身者が多いその残党はイスフィザール周辺の山岳に逃げ込んだあと (TS 207)、雪が積もる山岳にまで進攻して来たヤアクーブに屈服した。かれらは異教の山岳民の平地への侵入を防ぐ役割をになうかわりに、山岳部の支配権を容認され、税収が不足する部分の兵はヤアクーブ軍に参加し、名前が名簿に登録されて給与が支給されるようになった (TS 217-8)。

以上の事例から、シャアバーンが言うように、アイヤールは基本的にアッバース朝カリフに忠誠を誓う反「ハワリージュ」自衛軍（とくにその中核）と言えるであろう。ただ、地主や小経営農

民出身の「ハワリージュ」からの転向者 (4・6・8項) は、かれらの末期を除いてそれほど多くはないと思われる。土着支配層出身の指導者もいるが (ガッサーン、サーリフ)、主体はブストのガウガーと呼ばれる中下層民であり (1・2・3・5・7項)、他地域出身の人々もブストに流れて来た (1・2・6項)。清水はバグダードのアイヤール^⑥との比較研究の立場から、九一一世紀のスイジスターンのアイヤールを、時代を無視して、一つの同質のものとして論じた結果、任侠精神 (ステロ化した勇敢、男気、寛容、忍耐) と愛郷意識を強調したが、九世紀のアイヤールにそのような任侠精神を認めることはできないし (ただ、ザランジュとブストの支配層・中下層民に愛郷精神は認められる)、一〇世紀以後のアイヤールとはブストではなく、ザランジュの人々である。

九世紀のアイヤールはアッバース朝への忠誠を守る思想的・文化的な面と、「ハワリージュ」の略奪・支配領域の拡張に対する自衛の両面をもつが、中下層民がイニシアティブをもつことから、前者の側面がより強いと考えたい。したがって、アイヤールの行動や思想は、伝統的な政治的忠誠や経済的社会的秩序、文化・信仰にあくまで忠実であり、それが犯されたと感じたときに、国家権力を補完する意図をもって、比較的秩序だって立ち上がる都市

の中下層民一般の性格をよく表していると言えよう。プストがその中心になったのは、辺境に位置するために、総督権力が比較的弱く、住民がズンビールとの戦闘で鍛えられていたからと思われる。また一般的には、辺境は中央による統制や税の中央送付を排除して自治を目指す一方、正統的な国家権力の体现者には強い忠誠を保持している場合が多い。そして、アイヤールは政権を獲得して支配層に変質したあと、税収を州外に送付せず、給与を保証することで、多くの「ハワーリジュ」を吸収していった。

- ① *Ibn al-Haytham* 2, p. 97.
- ② 清水宏祐「スイースターンのアイヤール」『第三世界』の社会変動と地域研究』東京外国語大学海外事情研究所、一九八四年、一四—四一頁、「中世イランのヤクザ」、佐藤次高ら共著『イスラム社会のヤクザ』第三書館、一九九四年、九—六一頁。
- ③ 「スイースターンのアイヤール」三〇頁。
- ④ 同様な例は Maysara (ベルベルの反乱指導者)、Mugana, Babak 等数多。Emergence, pp. 92, 120-1, 151, 「イフリーキヤにおけるアラブの定着」p. 71, note 76.
- ⑤ ヤアクーブのイラク遠征時(二六〇/八七五)、アッバース朝はこれに迎合するためデイルハムを釈放した(Tabari III 1891-2)。
- ⑥ 八—一〇年代のバグダードのアイヤールは市を包囲したマームーン側の中央アジアとホラーサンの兵に対し、カリフ、アミーンのために執拗に市街戦を敢行した(Tabari III 867-916, 975)。かれらは一〇—一二世紀のブワイフ朝時代の組織化した任侠・無頼集団としてのアイヤールとは異質である。佐藤次高が分析したのは実質的にはブワイ

フ朝期のアイヤールである。「バグダードの任侠・無頼集団」『社会史研究』三号、一九八三年、七四—二一八頁。

結 語

以上の検討から、スイジスターンの「ハワーリジュ」は、中央集権的税制改革に反対する土着支配層を中心とし、かれらの保護下にある小経営農民やアラブ地主が加わった広範な人々であることが確認できた。ハムザの乱は成功し、ザランジュを攻撃しないかわり、歴代総督に妥協を強い、自らの支配地域を確保し、総督の支配地域や近隣の異教徒の国々を略奪する一方、総督の支配地域でも地主や小経営農民に対する過度の収奪を防ぐ役割をもった。したがって、この運動は反貢租運動、中央に対する地方の抵抗という性格をもち、アッバース朝への忠誠を保持するアラブや土着支配層も略奪を受けないかぎり、妥協しうるものであった。こうして、ハムザ末期以後、運動は総督と妥協してしだいに体制補完勢力としての性格を強め、小経営農民出身の「ハワーリジュ」の中核も職業的な軍事集団または匪賊と化していった。「ハワーリジュ」は思想的にはアッバース朝カリフの宗主権を認めなかったし、匪賊化する部分があったため、ハムザの乱に対抗して、とくに辺境のプストでは、カリフへの忠誠を堅持し、略

奪からの防衛を目指す反「ハワーリジュ」勢力が伝統的秩序の維持を願望する都市の中下層民を中心に勃興し、一部支配層の支持をも獲得した。かれらの中核部分はアイヤールと呼ばれるようになった。かれらはカリフに任命された正統的な総督には極力、忠誠を誓う意志をもっていたが、「ハワーリジュ」と妥協した総督や支配層とは執拗に戦った。それも、伝統的な政治・経済秩序や

文化的伝統を回復・維持することが主な目的であり、意識の上では革命勢力ではなく、国家権力を補完する意図をもっていた。しかし、政権を握ったあと、アイヤールは税収から給与を受ける支配勢力に変質し、税収の州外への送付を拒否することで、多くの「ハワーリジュ」をも吸収していった。

（東京経済大学教授

）